

仙 石 さ ん の 印 象

國 澤 新 兵 衛

仙石さんから私が第一印象を受けてゐるのは學生時代の事であつた。

明治十九年に東京大學が、帝國大學と改められた時、私達は當時土木科の學生であつた丹羽鋤彦、渡邊六郎其他の同窓と都合七人で、夏季實習の爲に、日本鐵道の東北線測量に從事した。仙石さんは其時工事現場の監督技師として多忙な日を送つてゐられた。詰所は黒磯の傍の高久と云ふ處にバラック建の小屋があつて、其所の一室が仙石さんの宿舎に當られてゐたが、こんな田舎の工事場にゐても、仙石さんが非常な勉強家である事を知つて驚いたのであつた。

それは(スペンサー)か何かの經濟や政治に關する外國書物を讀んでゐられる事であつた。現場工事の忙しい間に於て、然も工學以外の新知識を求めてゐられるには全く敬服したのであつた。

それから我々學生の測量班は、三人と四人の二組に分れて、一組は白川から福島に向つて測量し、他の一組は福島から白川に向つて測量する事になり、先づ仙石さんに連れられ、馬場謙と云ふ二等技手の人達など踏査に着手した。夏の暑い盛りの頃であつた、仙石さんはよくマクワ瓜などを食べられた、而して『自然が人類に與へた苦熱の際の賜物だから、決して悪いものではない』と云はれてゐた。

當時我々學生の一行は總てフラジ履であつたが、仙石さん一人は編上けの長靴で、然も其靴は頭の尖つた鉄を打つた頑固なもので、當時としては非常に異彩であつた。仙石さんは常に其靴を穿いて何處へでも行つてゐられた。特に驚いた事は松葉館と云ふ料理屋で一同が中食する事になつたが、仙石さんは例の鐵鉢の靴履きの儘で座敷に上つて行かれたに

は一同驚いて了つた、然しそれも阿武隈川の沿岸を踏査する時、磊々たる岩石の間を登り降りした時には、さすがに仙石さんも閉口して靴を脱がれたので、學生達が萬歳を稱へてハヤし立てた様な事もあつた。

毎日の踏査中も、隨伴してゐる工夫が度々注意してゐたが、中々ウツカリ出来ない。朝になつて宿を出發する時、仙石さんはまだ顔を洗つてゐるから急ぐ事はないと思つてゐると、洗面がすむと直に『サア行かう』と云つて出掛けられる。朝飯も食べないで出掛けるので皆不思議に思つてゐると、實はもう既に寝床の中で食事は済してゐたのであつた。

斯んな有様で二ヶ月程の間に、白川と福島の間の線路の踏査から實測をやり、中心杭を測設して幅杭まで入れて、我々が二三哩も進む後からドシドシ工事に着手する有様で、實に敏速なるものであつた。

餘談になるが、其以前栃木縣令の三島通庸氏が東北三縣に一大道路政策を實行して、田でも畠でも無償で道路に取上げた事があるので、地方民は當時の道路工事を大變怖がつたものであるが、鐵道敷設になつては、公用土地買上規則と云ふものがあつたから、鐵道用地を買上げてやる、地價で買つて貰へると云ふので農民は大變に喜んだ、斯んな具合であつたから用地の買收は實に樂なものであつた

明治二十四年の暮の議會に、『全國鐵道調査費』認定の案が提出される事になつたが、議會が解散になり、三十五年春に品川内務大臣の下に總選舉が行はれ、次の議會で愈々調査費が決定されたので、井上鐵道長官の下で仙石さんは全國鐵道調査に非常な努力をされた。最も仙石さんの上に原口、増田、小川などの諸先輩があつたが、仙石さんが殆んど總